

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Triana Istiqlal
論文題目	Biopsychosocial Study on Depression in Indonesia: A Comparative Analysis between Urban and Rural Areas of South Sulawesi (インドネシアにおけるうつ病の生物心理社会学的研究 —南スラウェシの都市と農村の比較分析—)		
(論文内容の要旨)			
<p>世界的にみて、うつ病は最大の健康障害の1つであり、インドネシアでは患者が急増している。うつ病の発症には、遺伝、文化、社会、環境など様々な要因が絡んでいる。そこで本研究は、うつ病のリスク因子を生物心理社会モデルにより明らかにし、うつ病発症の過程を総合的に理解することを目的とした。</p> <p>第1章では、インドネシアにおける疫学的状況、うつ病の遺伝学的・生物学的メカニズム、文化心理学的背景、社会経済的因子についての先行研究をまとめた後で、生物心理社会モデルの潮流を紹介した。</p> <p>第2章では、調査地である南スラウェシ州のマカッサル市とトラジャ地方のことを概観し、文化や社会経済的環境からみて、それぞれが都市と伝統農村の特徴を有することを述べた。</p> <p>第3章では、文化心理学的尺度である「シンゲリスの文化的自己観尺度 (SCS)」と「行動抑制システム (BIS) ・行動活性化システム (BAS)」のインドネシア語版を開発し、その妥当性を検証した。そしてマカッサル市において、うつ病患者 (症例群165名) と一般市民 (対照群204名) の症例対照研究を行い、結果として年齢・性別・宗教・教育・職業という交絡因子の影響を調整したうえで、SCSの相互協調的自己観とBAS系の3尺度が、それぞれうつ病患者であることと関連していることを明らかにした。</p> <p>第4章では、同じマカッサル市の症例対照研究の枠組みにおいて、調査参加者から得られた血液から、セロトニントランスポーター遺伝子<i>SLC6A4</i>、ドーパミン受容体D4遺伝子<i>DRD4</i>、モノアミン酸化酵素遺伝子<i>MAOA</i>の多型を解析し、これらの多型がいくつかの文化心理学尺度とうつ病に関連していることを明らかにした。マカッサル市の社会が個人主義的な傾向があることを踏まえると、特に着目すべき結果は、<i>DRD4</i>の多型は可塑的であり、Lアリル保持者が非相互協調的環境にいと、うつ病のリスクとなることであった。また民族による違いもみられた。これらのことは遺伝子、文化心理学的因子、そして文化が相互に絡んでうつ病の要因となることを示した。</p> <p>第5章では、トラジャ地方における一般市民参加者 (192名) に対して、うつ病の診断をしたうえで、同様に文化心理学的尺度調査と遺伝子解析をおこなった。μオピオイド受容体遺伝子<i>OPRM1</i>とオキシトシン受容体遺伝子<i>OXTR</i>について解析したところ、</p>			

*OXTR*の多型と行動抑制システムが、うつ病の因子であった。一方、社会経済的因子とうつ病との間に関連は見いだされなかった。この結果は、集団主義的とされる農村部においても、遺伝的因子と文化心理学的因子がうつ病を引き起こし、しかもそれは社会経済的格差よりも強い要因であることを示した。

第6章では、遺伝的多型が神経系における生化学的反応に及ぼすメカニズムや、遺伝子—文化（環境）相互作用説などに触れつつ、総合的な考察を行った。その上で本研究は、インドネシアにおけるうつ病の理解と治療に大きな貢献をすることと、生物心理社会学に新たな実証的知見をもたらすことを指摘した。